

「あいねイラン」シリーズ①

『ガーリーシューヤーン マシュハデ・アルダハールにおける象徴的絨毯洗いの祭礼』

本書は、イラン・イスラーム共和国の文化研究所から刊行されている「(自分は)イランの何を知っているか？」シリーズ5巻目の全訳である。原著の初版は2000年。著者はイランの「科学的人類学の父」と呼ばれるアリー・ボルークバーシー博士である。ペルシア語で「ガーリー」は絨毯、「シューヤーン」は洗う者たちを意味するが、なじみの薄い日本の読者にとって「ガーリーシューヤーン」というタイトルのみで内容を想像するのは難しいのではないだろうか。主題に据えられているのは、イラン中部カーシャーン近郊の村マシュハデ・アルダハール(殉教地アルダハール)で毎年秋に行われる祭礼「ガーリーシューヤーン」である。

本書は7章で構成される。開催場所であるアルダハール村の地理・歴史にはじまり、儀礼の中心となるソルターン・アリー廟、絨毯を取りまわす祭礼の詳細や伝承、文化的背景などが語られ、ユネスコ無形文化遺産にも登録されている宗教的伝統行事の全体像が鮮やかに浮かび上がってくる。「イランの何を知っているか」シリーズが意図するところは、イラン人自身による自国イランの姿の描写であろう。第2章で述べられるシーア派第5代エマームの子ソルターン・アリーの殉教伝説、第4章・第5章の儀礼の起源をめぐる考察など、イラン人の精神文化の根本を垣間見るようで特に興味深い。

翻訳出版に至る経緯は、巻末の「解説とあとがき」で八尾師誠先生が詳しく述べておられる。先生主催の「ペルシア語勉強会」で購読していたテキストを、2020年11月PAO出版のご好意により出版という形で世に出す機会を頂いたものである。実は、訳者は当勉強会の最初期からの参加者だ。自由な雰囲気を楽しみつつ、気がつけば30年近くが経とうとしている。学生時代の恩師についてテキストを読む作業の中では、つい授業の延長という感覚を捨てられず、また、いつか活字になろうとは夢にも思わず、当初は訳文への配慮よりもっぱらペルシア語そのものの読解に軸足を置いたことを覚えている。「ガーリーシューヤーン」購読開始から出版まで約5年の歳月を要したが、読み手の視点を意識できたのはかなり後になってからのことだった。反省しきりである。

勉強会の進め方は、訳者が下訳を準備し、それを叩き台として参加メンバーが自由に意見を述べ合い、訳文を修正・完成させていくという方法が取られた。複数人で行う翻訳のメリットを実感したエピソードをひとつご紹介したい。第2章、前述のソルターン・アリーが敵方の謀略にかかり悲劇的な殉教を遂げる場面を検討していた際のこと、用意した訳稿について、八尾師先生から訳し漏れている部分があるとのこと指摘を頂いた。敵軍の指揮官が女性たちを戦場に送り込んだため、ソルターン・アリーはやむなく自軍の男衆を後退させるというシーンであったが、原文をどんなに眺めても先生のおっしゃる「『裸の』女性」という単語は見当たらない。そこで、先生が手にしていたのが2000

年発行の初版第1刷だということにはたと気がついた。訳者が底本としたのは、翌2001年に出された初版第3刷である。テキストを読み進めていくと、第1刷と第3刷では他にも何か所か相違のあることが明らかになった。第2章以外では、聖者ソルターン・アリーにまつわる伝承が述べられる第6章と儀礼の担い手である近隣の各集団に関する考察である第7章に多く見られる。物議を醸す（可能性のある）記述ということだろう。変更部分については本書訳注に記載した。

2020年2月コロナ感染拡大の直前、幸いにもマシュハデ・アルダハールを訪れる機会を得た。祭礼の様子はインターネット上の画像等で見ていたものの、やはり現地視察で得られたものは限りなく大きい。例えば、原文では隔靴搔痒の感のあったソルターン・アリー廟建築の描写も、現物を前にすれば一目瞭然である。村の周囲に聳え立ち雪を頂く山々は神々しいばかりに美しく、マシュハデ・アルダハールが聖地とされる所以を一瞬にして理解することができた。タイミング悪くその冬一番の寒波に見舞われ、高原の避暑地アルダハールで震えあがったことも、今となっては良い思い出である。



マシュハデ・アルダハールのソルターン・アリー廟（2020年2月、本多撮影）

本書出版にあたっては本当に大勢の方々にお世話になった。ご指導頂いた八尾師先生、勉強会のメンバー、株式会社包の代表取締役安仲卓二氏、編集者の嶋岡尚子氏、デザイナーの萩原誠氏に心からの感謝の意を表したい。また、拙い訳文をお見せした、元上司のU氏と知人のO氏からは適切な助言を賜り、特にO氏には原文中のアラビア語翻訳で全面的なご協力を頂いた。編集者の嶋岡氏から再三勧められたもののどうにも気恥ず

かしく書くことのできなかつた「訳者あとがき」にかえて、この場をお借りして御礼を
申し上げたいと思う。

(「ガーリーシューヤーン」訳者 本多由美子)